

小林秀雄を読む

——「思想と実生活論争」・文集「栗の樹」を教材とした授業——

金本 宣保

高等学校の現代文のまとめとして、小林秀雄の文章を教材とした授業をした。正宗白鳥との論争「思想と実生活論争」における「作家の顔」を中心とした学習をした。対立した立場から主張することで、物事を明らかにしていく文章を読みとり、文章を生きたものとしてとらえさせたることをねらいとした。作文で小林秀雄の考え方を、自分の生活を通して考えさせ、表現の方法を練習させた。「無常という事」を読解し、発展の学習として、講談社文芸文庫「栗の樹」を読み、小林秀雄の文章から好きな言葉を選んで解説を書かせた。読みを広げる事をねらいとした。その時々自分で読み、考えを深める社会人として成長して欲しいと願った。生徒が興味を持って学習していくことから、国語の力は深まっていくと考え、1時間1時間の授業をしてきた。作文から指導者のねらいは達成できたと判断している。

はじめに

明治書院の「精選国語1二訂版」には、加藤周一の「日本文化の雑種性」が評論教材として採られている。その書き出しの文は次の通りである。「私は西洋見物の途中で日本文化の事を考え、日本人は西洋の事を研究するよりも日本の事を研究し、その研究から仕事を進めていったほうが学問芸術の上で生産的になるだろうと考えた。」下線部に注目すれば、この文は、「西洋の事を研究する」事が、何よりも必要なことだと考えている多くの日本人がいる、そういう人がいて、次の進み方を模索する人がいて、そういう中で、今、考えながら述べられている。そういういきものとしてこの文を読めば書き出しからすでに面白い。「日本文化の雑種性」のもっている、新しい時代思潮をつくっていく勢い、澁刺とした知の動きに触れる事もできるであろう。この文の書かれた日本の1955年、戦後10年という時代を思いみたり、戦後10年までの文章を読んで調べてみるという深め方も考えられる。もしこの文を、結論「日本人—日本のことを研究—学問芸術の上で生産的」とまとめ、後にこの結論が、詳しく展開されるというように、結果だけ整理して受けとめるだけでは、おもしろくないであろう。その結論は、日本と西洋という日本の近代化の精神の大きな課題への一つの答ではあるが、高校生が、その答を正解として理解したとしても、高校生が教室で学ぶ教科の学習が、ほとんど西洋伝来のものであり、また、大学へ進んで学問をすることの中心は「西洋のことを研究する」ことであることに気付いていなければ、生きることと結びついた力にならない。対立をつくり選択していくものとして読むことで、文章が分かってくる。読む楽しさを味わうことができる。

1 小林秀雄「思想と実生活論争」を読む

小林秀雄を教材とした授業をすることは、1991年度に高校1年でこの学年の国語の授業を担当した時から考えていた。高校3年を、普通教育の最終学年と考え、小林秀雄の文章を自分なりに読むことができることを一つの到達すべき目標とし、高校1年、2年の現代文の授業をしてきた。評論に限らず、小説を読解する授業、作文の学習、読書指導をも含めて、小林秀雄を読むための力となる。

古典は他の教官が教えたが、その学習も小林秀雄とつながっている。それは小林秀雄の見方を紹介することではないし、小林秀雄の方法を意識して読解するという事ではない。その時、その教材に最も良いと思った授業をしてきたのであるが、文章を読む力を、小林秀雄の文章を読む事ができるという基準でみると分かりやすい。その水準まで高めていきたいと考えていた。1988年度には高校3年生で、小林秀雄の「無常という事」を中心の教材として授業をした。1993年度は、「思想と実生活論争」を中心の教材として授業をすることとした。「無常という事」は、高度に凝縮された思索があるが、「思想と実生活論争」における「作家の顔」には、旧世代に新世代が挑戦するという分かりやすさがある。論争の持つ人間臭さが、俗な興味をひく。偉い人の述べ給う真理ということだけでなく、理屈の言い合いと読むこともできる。さらに論じられている内容は近代に於ける二つの基本的な考え方が対立して表されている。そして今我々をとりまいてる意見（情報という人もいるが）をどうとらえるか、本質的な考察を求めるものである。生徒が自分と結びつけて、興味深く学ぶことができるだろうと期待できる。教材としての難点は「思想と実生活論争」が論争が一般的にそうであるように明確な結論は出ていないし、その中のはじめの正宗白鳥「トルストイについて」と小林秀雄「作家への顔」だけを教室で読むので、結論はこういうことだというように完結したものとして納得することができないことである。しかし、国語の教室での教材についてのまとめは、一つの段階としてのまとめであって、生きて継続していくものを、授業の結びということで結論を出しているものである。対立点を読む過程としてとらえることによって読みを深めるということとで、論争文の特質を活かした授業を展開することができる考えた。

2 授業の展開

①「思想と実生活」論争

教材	トルストイについて	正宗白鳥（讀賣新聞・1936年1月）
	作家の顔	小林秀雄（讀賣新聞・1936年1月）
	文藝時評(抄)「抽象的煩悶」	正宗白鳥（中央公論・1936年3月號）
	思想と實生活	小林秀雄（文藝春秋・1936年4月號）
	文藝時評(抄)「思想と実生活」	正宗白鳥（中央公論・1936年5月號）
	文學者の思想と實生活	小林秀雄（文藝春秋・1936年6月號）
		（未来社「現代日本文学論争史下巻」から）

展開	「トルストイについて」	1時間
	「作家の顔」 時代背景、本文の解説、まとめ	2時間
	「抽象的煩悶」「思想と実生活」読む	1時間
	作文「思想と実生活論争」について正宗白鳥と小林秀雄いずれに賛成か意見を書く	1時間

②「無常ということ」 精読 4時間

③「中原中也の思い出」「お月見」「美を求める心」を読む 1時間

④ 講談社文芸文庫「栗の木」を読む 1時間（夏休みの課題）

⑤ 作文「小林秀雄の言葉」 1時間

3 作文「『思想と実生活論争』について書く」

正宗白鳥の「トルストイについて」と小林秀雄の「作家の顔」をまとめ、二人の立場を読みとった後、（続く文章は各自の学習に任せた）正宗白鳥と小林秀雄とのいずれに賛成か、意見を書かせた。

1段「正宗白鳥は…と述べ、小林秀雄は…と述べている。」まとめ

2段「私は {正宗白鳥
小林秀雄} に賛成である。」立場

3段 理由（論理的に説明しなくてもよい。現在の社会事象、自分の体験などをとりあげて具体的な事例で述べる）説明

時間 1時間

字数 400字程度

生徒の書いた作文6年（高校3年）A組の生徒の中から小林秀雄に賛成の例

- A. 正宗白鳥は、実生活は人生の真相であると述べ、小林秀雄は、思想は実生活から決別する、と述べている。

私は小林秀雄に賛成である。例えば、最近、角川社長が麻薬を使用していたため逮捕されるという事件があった。それなりに私にとってショックな出来事だったが、角川社長の監督した、上映中の映画が打ち切り、そして、封切り間近であった映画の上映も見越されるとのニュースは私には理解できなかった。

トルストイの私生活を取り上げ、彼を批判した正宗氏に対し、小林秀雄は、彼の偉人英雄としての面は実生活から離れた、文学の一人の作家としてのトルストイにあると述べていた。私も、この意見に賛成だ。角川社長が私生活で、不祥事を起こしても、彼の作品である映画には関係ないように思う。もっと言えば、彼個人の作品ではなかったはずである。彼自身に与える処置は、考慮する必要があると思う。しかし、彼の作品にまで、その処置が及ぶのはどうかと思う。思想は実生活から決別する。全くその通りである。

- B. 正宗白鳥は、思想はそれが生まれた実生活とは切り離せないものと述べており、一方、小林秀雄は、思想は実生活と決別してこそ意味を持つものと述べている。

私は小林秀雄に賛成である。

正宗白鳥は当時の風潮、優れた作家が神格化といって過言でないように、あまりにも盲目的に尊ばれている国内の風潮に一石を投じる意味でトルストイの実生活を書き立て、自分の思う所を述べたのだらうと思う。しかしこの考えを進めると、日本人特有の「横一線の美学」に行き着くように思えてならない。現代においては、例えば、優れた作品を残した芸術家の実生活を暴き、それをふまえた上で作品を観賞しようという番組が好視聴率を得ているが、「この作品の背景を探ろう」と銘うちながら、「こんな偉大な人でも、普通の人間と同じなのだ」という思いにひたってははいないか。そして、作品の影に作者の影がちらつき、その作品を独立したものとして見ようとする純粋な目が損なわれていないか。小林秀雄の言う「リアリズムの仮面

を被った感傷癖」とは、このことを指していると思われる。そして、作品が作品となったとき、思想が思想となったとき、実生活から訣別することで他の人々にも受け入れることのできるものになるのだと述べている。そういったものを生みだした人間こそ優れた作家であり、その作品・思想、そして作家としての彼自身の評価は、揺らぐことが決してあってはならないのである。

- C. 正宗白鳥は「実生活と縁を切ったような思想は幽霊のようで案外力がない」と述べ、小林秀雄は思想は実生活から訣別しなければ力がないと述べている。

私は小林秀雄に賛成である。

なぜなら、思想は一般的に適用されて初めて実際に力を発揮するからだ。実生活は勿論特殊なものだから思想がそれと訣別しない限りその拘束を受ける。最近アインシュタインが実生活ではとても立派とは言えない様子だったということが話題になっているが、だからといって彼の理論を否定することはできない。これは彼の理論が彼の実生活から切り離されていることを示す。しかし彼の理論は絶対的な力をもっている。科学的理論は比較的容易に実生活と切り離せるが、例えば道徳的なものなど、切り離しにくい思想がある。

正宗白鳥に賛成の例

- D. 小林秀雄は「生まれて育った思想が遂に実生活に訣別する時が来なかったならば、凡そ思想というものに何の力があるのか」と述べている。正宗白鳥は「思想は実生活と訣別するどころか、深い関係をもっている」と述べている。

僕は正宗白鳥に賛成である。

思想という言葉を実生活における思想と解釈してみた。今までの歴史を見てみると、私たちはより便利な物を求めて研究し、発明することで、今日の文化的な生活を営めるまでに至った。現在ないものを将来実現したい、手に入れたいという願望こそが、実生活の理想そのものなのだ。しかしその願望は現実の不自由さから生まれてくるもので、将来の豊かさと密接に結びつくものである。だから正宗白鳥に賛成する。

- E. 小林秀雄は思想は実生活と訣別しなければ何のちからも持たないと述べ、正宗白鳥は実生活と縁を切ったような思想は幽霊のようで力がないと述べている。

私は正宗白鳥に賛成で、思想は実生活と強く結びついていて、またそうでなければ説得力がないと思う。

なぜなら、例えば政治家が自分の理想を述べる時、その思想がどんなに立派に聞こえるものであっても、彼の実生活がその思想とかけ離れたものであったなら、誰が彼の思想に心を動かされるだろうか。思想は、個人の心の中ではどういう思想もそれは思想だが、それを大勢の人に発表するとき、その人の実生活に基づいていないものは、人の心を動かすことができず、それはただの空想となってしまう。映画などでも、私たちが一番心に感じるものは、ファンタジーやSF等ではなく、ノンフィクションのものだろう。聞く人に最も強い影響を与えるものが力のある思想で、それは現実に基づいたものだと私は思う。

考察

Aは、1993年の夏、その作文の授業をしていたとき、話題になっていた角川春樹コカイン蜜輸入事件をとりあげ、角川春樹と事件との関係への見方を述べたものである。他にも一人同じ事件を作文の材料にとりあげた生徒がいて、それも同じ立場であった。週刊誌やテレビの番組で話題になっていることの取り上げ方がどういう見方に基づいているのかをとらえている。自己の考え方を自覚し、社会を批判的な立場から考察するということが、この授業のねらいの一つであった。

Bは文章を書く力のある生徒である。同じメディアの問題を取り上げながら、問題をより総合的にとらえている。「リアリズムの仮面を被った感傷癖」と小林秀雄の言葉を、テレビ番組において知ることに当てはめている。それが地に足のついたものとなっているのはこの生徒の読み書く力であるが、小林秀雄の「作家の顔」が現在も意味を失っていないということでもある。

Cは、アインシュタインを例に持ってきた着想がよい。授業で発表させた時、終わりの一文「道徳的なものなど切り離しにくい」と述べた文は切り捨てた方がよいと指導した。完成した文章としてみると最後の一文は不要である。しかし、今思い返してみると、この一文は、自分の述べていることの当たらない面に考えを及ぼして、この生徒の視野の広さを表しているとも言える。書き手の成長という観点からみれば、むしろ美質の表れかも知れないと思える。

D、Eは正宗白鳥に賛成した立場から書かれたものだが、思想を社会思想というものととらえている。実践的な考え方をする生徒である。この場合、正宗白鳥に賛成ということよりも小林秀雄に反対ということになっている。指導者の授業の意図も「思想と実生活論争」の正宗白鳥と小林秀雄との論旨を読みとらせることではなく、論争における小林秀雄の考えを読みとらせることであった。

4 「栗の樹」(講談社文芸文庫)を読む

発展の学習として、講談社文芸文庫、小林秀雄「栗の樹」を読ませることにした。1988年には中公文庫の「人生について」を採用したが、「人生について」には、少し長くて内容の深い「私の人生観」があり、指導者の好きな「中原中也の思い出」があり、他に読みやすい「天の橋立」「お月見」の十数編もある。その当時としては教材として最もいい一冊と思われた。「栗の樹」を選んだのは、「私の人生観」という中心になるものがあり、「天の橋立」「お月見」等の読みやすいものがあり「中原中也の思い出」はない(これはプリントして配布した)が、「無常という事」「平家物語」「西行」があり、読みやすく美への対し方を教える「美を求める心」があるからだ。「失敗」は楽しいし、本の題になっている「栗の樹」もいい。

定価が1,100円で、生徒の中から「高いなア」という声があがった。それに対して指導者は、夏休み前に買わせたのは、夏休み中の勉強の合間に読んでもらいたいからだ。昼寝のもとになるかもしれないが、小林秀雄を読みながら眠るのもいい。この中の2編も読めば1,000円の価値になる、3編読めば、十分もとはとれると言った。

高等学校卒業後も、書棚の中に「栗の樹」があるのもいいではないか。文学青年でなくて常識を備えた大人の本として置いていてかっこうもいい。時に開いて読めばなおいい。題も「人生について」は少々恥ずかしいかもしれないが、「栗の樹」は洒落ている。知らない人にはエコロジー関係

の本だといってもいい。ところで、1994年3月に、この生徒達が卒業した後、生徒が教室の机やロッカーに残した物を整理したが、遺失物のなかに、「栗の樹」が3冊あった。いずれもきれいな本であった。

教室では「無常という事」は、読解の授業をし、他に数編読み、その後の1時間を次の作文を書く文章を選ぶために各自で読む時間とした。

5 作文「小林秀雄の言葉」解説文を書く

小林秀雄の文章から好きな言葉を選んで、その解説文を書かせた。6月から夏休みをはさんで10月に渡る授業であったが、作文の課題は夏休み前に示しておいた。生徒の作文の例は以下のようである。下線部は指導者が読んでいい所として生徒に示した部分である。

F. 「見ることも聴くことも、考えることと同じように、難しい、努力を要する仕事なのです」から。

私は見たり聞いたりすることは易しいことで、努力など要らないと思ったけれど、私のバレー経験から考えてみると、なるほど小林秀雄の言う通りだ。アタックを打とうとするとき、ボールの高さ、速さ、回転の具合をとっさに見分け、そして、ボールがあつた位置に来た時に助走してジャンプすれば、ジャストミートで打てるということがわかるようになるには、かなりの練習が必要だ。それは、タイミングや慣れの問題であるということもできるが、見る努力をした結果だと思う。レシーブで言うならば、ものすごく速いボールが飛んで来たとき、以前には手も足も出なかったが、何年もたつとどんなに速いボールでもスローモーションのように見て追うことができるようになった。 本当だよ。

G. [お月見の晩に、伝統的な月の感じ方が、何処からともなく、ひょいと顔を出す。取るにたならぬ事ではない、私達が確実に体でつかんでいる文化とはそういうものだ。] (『お月見』より)

私達が文化というものを意識するのはどういう時であろうか。確かに美術館で日本画展などを見ると日本文化を目で見てとらえた気になるが、それらに描かれた景色は頭の中で日本の象徴的なイメージとして自分が受けとめているものであり、日常的とはいえない古い日本の姿であるように思う。現代において目で見てこれが日本文化だと思うものは城や庭園など昔の遺物がほとんどである。しかし目で見ることのできない文化は私達の心や体にしみこんでいるものなのだ。先週の金曜日は仲秋の名月だった。昼間は曇っていて残念だねと、友達と言っていたのだが、偶然見ることができた。4時間くらい畳の上でうたた寝(?) をしてふと目を覚ますと午前3時、ちょうど見上げた所にぽっかりと月が浮かんでいたのだ。空は澄みわたり、何ともいえない美しさだった。下に降りると祖父と祖母が物音で目をさましてわざわざ庭まで出て3人で月を眺めた。何か神秘的な気持ちで「いい月だね」と言うばかりでそれ以上何も言えなかった。 このような気持ちは世代を越えて通じるものなのだろうか。生きてきた時代も違うのに同じ感じ方で月を見てしまう。きっと昔から少しもかわらない感情なのだと思う。

H. 「悲しみの歌を作る詩人は、自分の悲しみを、よく見定める人です。悲しいといってただ泣く人ではない。自分の悲しみに溺れず、負けず、これをはっきりと感じ、これを言葉の姿に整

えて見せる人です。」（「美を求める心」より）

この文章を読んだ時、私は中島みゆきという歌手の事を思い浮かべました。この人は、とても暗い歌ばかり歌い続けています。私は今まで、中島みゆきのことを、失恋や悲しみをひきづり続けているのだと思っていました。そうでなければ、悲しい歌を歌い続けるわけがありません。幸せなことがあれば、その幸福な気持ちを詩につづるでしょう。しかし、この言葉を読んだ時、この考え方はちがっていることに気付きました。実は、中島みゆきは、冷静な人かもしれないのです。冷静だからこそ、悲しみを詩に変えてゆけるのです。強い人だからこそ、心にしみ渡る詩が書けるのです。そして数々のヒット曲を生み出したのです。この言葉のおかげで、会って話しをしたこともない一人の人を、少しだけ理解できたように思います。

- I. 「元来理屈から言って、自己の姿などというものはいつまで経っても見えるわけのものではない。己を知るとは自分の精神生活に関して自信をもつという事と少しも異なった事ではない。（中略）そしてこの自信を得るのにはどんなに傑れた人物でも相当の時間を要するのだ」（「文科の学生諸君へ」より）」

私はこの部分を読んでなんだかほっとした気持ちがしたのである。というのは、私には私自身がどういう奴なのか分からないからである。それにもかかわらず、今までに何度か自己分析をしなくてはならない事があった。例えば、塾の調査書のようなものの中に、自己分析を書かなくてはならないような欄があった。私はいつまでたってもその欄をうめることができず、結局、友人の力をかりて「友人から見た私、」といったものを書いてその時は提出したのである。

- J. 「人間は自己を視る事から決して始めやしない、自己を空想する処から始めるものだ」（「文科の学生諸君へ」より）」

人間が自己の姿を視ようとすることは必要ないと思う。自分の次の段階を空想してなろうとすることに比べて、自己の姿を知ることなどたいしたことではない。この後の文に、人間は自己の姿を視れない、と言っているように、自己の姿を求めてもそれは無駄である。そもそも自己の姿を視ることに何の価値があろうか。自己の姿の嫌な所をなおしても、それは他人には分からないし、かえってそれが不快に思われるものである。消極的に自己の姿を求め、幻影に追われるのなら、自分が空想する自己に自分を積極的に近づけて行く方がどれだけ価値のあることであろうか。自己の姿を知ったところで、自分は何ら成長しないのであるから、そんなことに膨大な時間をかけることは意味がないと思う。

- K. 「歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしているので、心を虚しくして思い出す事が出来ないからではあるまいか。」（「無常ということ」から）」

私は、これは全てに当てはまると思った。科学が人間の手に負えないところまで発達し、更にまだどこへ向かうかも見当がつかないまま発達し続けるのは、人類が生まれたあの頃を思い出せないから。医学面でも医学が人間の心の問題を置き去りにして発達してしまっているのも、自分がまだ小さな生命体であった頃を思い出せないから。地球を人間がどんどん壊すのも、地球が誕生して、そして生物が生まれた頃を思い出せないから。結局、人間は頭がよくならず（？）心で感じる事が出来なくなってしまうと思う。言葉を浮かべず、無にして、少し立

ち止まって、ほうっとしてみると、小林秀雄の言うように周りの物が何かを感じさせてくれるような気がしたら、人間は変わると思った。

- L. 「今日のように、知識や学問が普及し、尊重される様になると、人々は感ずる能力の方を、疎かにするようになる。(中略)物の性質を知ろうとする知識や学問の道は、物の姿をいわば壊す行き方をするからです。」(「美を求める心」から)

物の姿を感じ愛することが美を解することではあるが、では逆に物の性質を知る事は美を解さないことであろうか。世の中の様々な事象に対して、それに関わっている人々のおかげで我々は、その集積により高度な文明社会に住んでいる。そして色々な物の実体や本質がわかってきた。はたしてそれにより、美が壊されているだろうか。僕は美を解する事と物の性質を知る事は、密接に関係した一つの活動であると思う。つまり、美に沈黙させられた時、人はそれに興味を持つはずである。又、欲望であったりもする。そして物の性質を知ろうとするのである。その過程においてもまた、感銘することもある。数学の研究や生物学、宇宙科学などもそうして発展してきたものと思う。美しさに沈黙させられてばかりではいけないのである。

- M. 「記憶するだけではいけないのだろう。思い出さなくてはいけないのだろう。」(「無常ということ」より)

この文の前には歴史と解釈についての話もあり、歴史が流れではないという小林秀雄の歴史観について説明されたが、この考えは私にはとても新しいものだった。今まで目にしてきたどの歴史関係の本にも見られなかったと思う。小林秀雄の歴史観について少し考えてみたが、まだよく理解出来ない。歴史は流れだという感覚が強すぎるのだろう。しかし、この歴史観は別として、歴史を「思い出す」という言葉は理解できたように思う。はっきりとはしないが思い出す、と言う感覚を感じた事はある。小林秀雄のいうのとは違うかもしれないが。歴史を思い出すということは非常に感動的なことだと思う。歴史を学ぶには、感情の起伏の少ない方がよいといわれるが、このように感動することはどうなのだろうか。カシュガルの写真を見ながらシルクロードのことを考えて感動するとき、小林秀雄のように、当時の絵巻物を見て心が動くように、「思い出」せたら、と思った。歴史的解釈も知識もない。私はただ過去に起こったことを知ることが好きなだけなのだろう。それでも記憶するだけではない、思い出すということができるようになりたい。それでいいように思えた。

- N. 「泥の中を歩いてきた自分の足跡をどうして今眺められようか。今時、私小説の書ける人はきっと砂地を歩いてきたのだろう。僕は自ら省みて、人間とは何物でもないと信じている。」(「作家の顔」より)

これは昭和11年発表の作品である。このとき小林秀雄は34歳、現在の私の2倍程の年齢である。私は小林秀雄のその時までの生き方を知っているわけではない。彼がどのような「泥の中」を歩いてきたのかは知る由もない。彼が過去を振り返れない理由も知らない。しかし、そこに「砂地を歩いてきた」イコール「私小説」の関係を成り立たせているのには、疑問を持つ。「私小説」というものは、むろん著者のおそろしく私的な小説であることに間違いはないであろう。著者が己の過去を振り返り、記された小説である。「砂地を歩いてきた」人にとって、

己の過去を書きつらねていくその作業は楽なものであり、楽しいものになるだろう。（「砂地」ばかりを歩いてきた人がいるかどうかは知らないが。）そうした意味では砂地を歩いてきたことと、私小説は、関係が成り立つ。私が注意したいのは、「泥の中」を歩いてきた人が、「私小説」を書けないか、ということだ。つらい記憶を文章の中に再現していくその行為は難しくもあり、ひどくつらいものであるはずだ。しかし、そのつらい記憶を整理するためにも、そして、自分の持つその過去を大切に扱うためにも「私小説」を書く必要がある場合もあるのではないかと思う。私がこう思うもののひとつに志賀直哉がある。「暗夜行路」「和解」など小説の形に書かれているこれらの作品の中核には、自身の父子関係が貫かれている。これらの作品は「私小説」の代表で、私は志賀がたしかに自分のそのつらい経験を小説に書いていると思えるのだ。人は作品で過去を再現するのが楽しいから書くのではない。自分の足跡をもう一度見つめ直すために書いていかなければならぬ場合もあるのだ。

- 「批評は、非難でもないが、また決して学問でも研究でもないだろう。それはむしろ生活的教養に属するものだ。」（「批評」より）

小林秀雄の書く「批評」の多くは文芸批評であり、この言葉もまた、彼の得意とする文学的な批評文について述べたものであろう。私がこの言葉から想起したのは次の二点である。それぞれについて簡単な考察を試みたい。

わたしは、実は小説が好きではない。無論嫌いではないが、特にかなりの長編作品には触れたいとも思わない。その理由は恐らく私のある部分での合理的性格に起因していると思われるが、とにかく長いのは読まないからどうするか。そこで原文を読まぬままに、解説書、批評文を読むことが多いのだ。多くの場合、そうすることで読書という作業の九割は達成できるものだと私は思っていた。事実そういう場合が多かったからだ。しかし、小林秀雄のこの文章を読み、批評文が単なる生活的教養であるとのくだりを読み、はっとした。私が読書に求めていたのは知識でしかなかった。それゆえ解説だけで事足りたのだ。では読書の目的は何か、それを考えるヒントを小林秀雄は私たちに与えているのだろう。

私が感じたもう一点は広い意味での批評の性質についてである。文芸批評は一般に学問、研究の一つと認められている。勿論社会科学の世界での批評はそう考えられている。小林秀雄はそれを真っ向から否定したのだ。批評家で通る小林秀雄がである。小林秀雄の真意は、質の低い、すなわち表層的な非難の羅列に満ちた現代の文芸批評への非難だろう。私は、社会科学まで含めた批評をその対象に考えたい。批評を越したところで、自らの真の考え方は初めて表れてくる。そのことは、文芸の分野に止まらず言えることだ。私は批評を読むのも、書くのも好きだが小林秀雄のこの指摘には、少しどきりとさせられた。

考察

Fは、自分が、高校時代にバレーボール部で活動した体験を、小林秀雄の言葉と対応させて語っている。ユーモラスに表現しているところがよい。

Gは、前半で「お月見」の内容をきちんとまとめている。後半がいい。「祖父と祖母」と一緒に

見たというところに、筆者の家族の雰囲気やうかがわせる。美によって祖父母と子とがつながっている。

Hは、小林秀雄を自分の好きな中島みゆきの歌によって「少しだけ理解できた」のである。

Iは、自分が何者かよく分からないので、「友人から見た私」を自己として紹介したということに不安に思っていたのが小林秀雄の言葉に読んで「ほっとした」。「自己分析」を当然のこととして求めることは、現代の幻想かもしれない。この生徒は本当に「いい人」なのだ。そういう人は自分を「いい人だ」と書けないし、小林秀雄の「無私」の人に近いのである。

Jも、別の面から「自己を視る事」が必ずしも大事なことではないことに気付いている。

Kは、小林秀雄の科学への批判をより強く主張している。一方、Lは、科学の価値を評価し、小林秀雄に批判的である。Lは、理系に志望している生徒である。

長い文章を書いたものもある。Mは高校に入学した時から歴史の勉強をしたいと語り、大学でも歴史の研究をしたいと考えている。「無常という事」の考えを「新しいもの」と受けとめながら、「無常という事」の要所を理解している。Nは、文学の好きな生徒で「作家の顔」の「私小説」について触れた部分について、志賀直哉の作品を読んで考えたことから批判している。Oも、文章を書くのが好きな生徒だ。「解説」でとらえてしまう自分について自覚をさせられ、「少しどきりとさせられた」とある。M、N、Oは長い文章で書いていて、内容も深い。それぞれ、今まで考えてきたことを、かえりみて、自覚を深めている。

FからOまで（その他の生徒のいい文章もそうだが）教室で発表させると、きく生徒は、小林秀雄はそういうことを書いているのか、とうなずいていたのだが、また、いかにもその人らしいことを書くものだと受けとめてもいたのである。

指導者も、同じ題で作文を書き生徒に紹介した。「私の人生観」から選んだ言葉について書いたが、1988年に「中原中也の思い出」について書いた文章も、プリントして紹介した。1988年は「無常という事」から「人生について」と展開した授業で、思考の凝縮度の高さを読みとることを授業の中心と考えたが、1993年の授業では、小林秀雄をもう少しやさしく、少し物語風にとらえてみようと考えていた。その考えの差が、作文にも表れているように思う。

小林秀雄の言葉

1993, 10

「一人に勝つとは、千人万人に勝つという事であり、それは要するに、己に勝つという事である。」
（「私の人生観」から 文庫348ページ）

小林秀雄は、「私の人生観」を宮本武蔵の話で結んでいる。小林秀雄を、時代劇の決闘者に喩えてみたい。「様々なる意匠」で、宮本顕治の「敗北の文学」に負けと判定されたが、小林秀雄の立った時代がどういうものであったかを示している。彼の文章は闘いであり、勝ってきた。「思想と実生活論争」において前代の形に挑戦し、時代の第一人者となった。「無常という事」では、荒野に一人で剣をふる士という風である。鉄砲隊に剣士が勝てる訳はないが、剣士の伝説は人々に勇気を与えてくれる。現実を越えて生きることを教えてくれる。

戦後の小林秀雄は、剣聖が語るという趣がある。

太宰 治は負け続けることで、「自分」を表現したが小林秀雄は勝つことによって、「無私」に至った。

1998年

「それは確かに在ったのだ。彼を閉じこめた得体の知れぬ悲しみが。」（「中原中也の思い出」から）

猫が、何もしないでじっところがっている。それが、生きることの悲しみを感じているのではないかと、見えることがある。大事にされている赤ん坊でも、度々、泣くものである。若い人や、大人は、普通のこととして悲しいことにあいながら、生きている。それを、人に語ろうとすると、あまりにささいで、他人の目からみるとひとりよがりであったり、大きな事件であれば、語る前から決まった言葉で「ーを失って」と片付けられてしまう。苦しいものだが、それがなくなると、生きている味わいがすべて失われると、思われる。たとえば、この言葉はガラスで、硬いガラスの向こうに流れる水をたたえている。永遠の表現ではないかも知れないが、つぶやいてみると、胸に響いてくるものがある。

6 国語教室の外で

担任している学級の生活日誌に次の様な文章が書かれた。

P. 1993, 9, 29 (水)

「私は、4年の時、本を100冊ほど読んだが、ほとんどが歴史小説であった。岩波文庫やそれこそ「栗の樹」の類の本などは模試か授業で読むだけであった。こう書くと今は読んでいる様に錯覚されるかもしれないが、そんなことは決してない。5,6年になって私は一冊の本も読んでいない。現国の授業で「栗の樹」を読む時に、理解する事が出来なければ出来ないほど、小林秀雄が偉大に見えてしまう。彼に「現代人は、鎌倉時代のなま女房ほどにも無常という事が分かっていない」(P80 14行目)などと、言われると、自分がなさげなく思われてしょうがない。

Q. 1993, 10, 7 (木)

「最近、ぼんやりと何かを見ていることが多いようです。見ている、というより目に映っているだけというような。小林秀雄の「美を求める心」と関係があるでしょうか。とにかく何かをひたすらに見ているだけなのです。例えば信号待ちをしている時に、葉の先から雨垂れが滴る様子とか。ところが別に何も思わず、ただその様子を感じているだけ。そして「きれい」だとか「おもしろい」だとかいう言葉が浮かんだ途端、見ることに興味が失せてしまう。逆に、文章でもよくあることです。漢文を読んでいて、ぼんやりと情景に思いを巡らせているのには時を忘れるのに、目の前に浮かんだ瞬間、興味が途切れる。言葉と感覚がつながった瞬間にそうなるのでしょうか。

Pは4年（高校1年）の時、司馬遼太郎や、池波正太郎等の歴史小説を「100冊ほど」読んだという。それが、「理解することが出来なければ出来ない程、小林秀雄が偉大に見えてしまう」と書い

ている。クラス担任として「分からない偉大なものがあると分かることが、成長したことだ」と書いて、また、クラス全体にも紹介した。Qは学力のある生徒である。指導者は「見る力」と書き、「どこまで黙って見る力が続くか、その力の尽きた時、言葉がでてくるという」と言った。PもQも国語の授業と違った場で、小林秀雄のことを語っている。ある生徒は、大学の入学試験の自分で書く書類の愛読書の欄に「小林秀雄『栗の樹』」と書いていた。

これらは特別な例であるが、小林秀雄の文章は、国語の教室の外でも、生徒に影響を与えている。

また、小林秀雄の授業が終わってしばらくして、郡司勝義「小林秀雄の思い出」（文芸春秋社1993年11月刊）を読み、文集「栗の樹」に出てくる栗の樹について、小林秀雄が「ところでね、断っておくが、栗の樹なんか生えちゃあゐませんや…」と言ったという話に驚いた。その部分を教室で紹介した。生徒の中に「事実をこえる真実ということかなあ」という声があった。が、思うに「栗の樹なんか生えちゃあゐませんや」というのが嘘であるかもしれないと思う。「栗の樹」は生えていてもいい訳である。小林秀雄、他の作家だってそうかも知れないが、分かったと思う時もあるのだが、しばらく経つとそうだろうか、と不安になってくる。